



正解のない問いにむかって

園長 野中 泉

新年あけましておめでとうございます。

今年も、全ての子どもたちにとって暖かな優しい一年でありますように

毎年言っていることですが、一年はあっという間です。保育園の一年は4月はじまり3月終わりですので、新年と言えどまだ年度途中ではありますが、それでも、毎年この年の瀬（原稿を書いている今はまだ12月です）には、「一年は早すぎる」と誰かと顔を見合わすたびに言い合わずにはられません。

唐突ですが、実は昔から「数独」というパズルゲームが好きです。新聞の日曜版にもありますよね。ところどころに空欄のある9つのマスに1から9の数字を埋めていく単純な遊びなのですが、必ず答えがある。しかも、それしかあり得ない必然の「答え」が決まっている。それが、とにかくスカッと気持ちがいいのです。

ところが、アトムでの日常、子育てや生活には、明快な答えなどほぼみつきません。そもそも、正解など最初からないような問いにばかり向き合うことになる、そんな日々。「数独」好きな私にはこれは、なかなかの苦行です。では、なぜ、ここにいいのか。いや、むしろ、ここにいたいと思いつけているのはなぜか。この問いに、今年もまた向き合い続ける一年がはじまります。

最後に、折に触れて読み返すユニセフでの黒柳徹子さんのメッセージと共に、全ての子どもに（今、戦禍にいる子達にも）優しい暖かな新しい年が来ることを願いながら新年のご挨拶とさせていただきます。

私が会った子どもたちは、みんな可愛かった。笑っている子ども、ふざけている子ども、赤ちゃんを、おんぶした女の子、さかだちを自慢そうに見せてくれた男の子、いっしょにうたった子ども、どこまでも、ついてきた子ども。いろんな子どもたちに、会った。そして 両親や姉兄を目の前で殺された子ども、ゲリラに腕や足を切り取られた子ども、親が蒸発し、小さい弟や妹を残された女の子、親友だった家畜が、飢えて死んでしまいぼう然としていた男の子、家も学校も、すべて破壊されてしまった子ども、難民キャンプを、たらいまわしにされている孤児たち、家族を養うために売春する子ども。だけど、だけど、そんな、ひどい状況のなかで、自殺をした子どもは、一人もいない、と聞いた。希望も何もない難民キャンプでも 一人も、いない、と。私は、ほうぼうで聞いて歩いた。

「自殺をした子は、いませんか？」「一人も、いないのです」

私は、骨が見えるくらい痩せて骸骨のようになりながらも、一生懸命に歩いている子を見ながら 一人で泣いた。

『日本では、子どもが、自殺してるんです。』 大きい声で叫びたかった。

こんな悲しいことが、あるでしょうか。豊かさとは、なんなの？

私がいろんな子どもに会って 日本の子どものに伝えたかったこと。

それは、もし、この本の中に出てきた発展途上国の子どもたちを、「可哀想」と思うなら、「助けてあげたい」と思うなら、いま、あなたの隣にいる友達と「いっしょにやっぺいこうよ」と話して。「みんなで、いっしょに生きていこう」と、手をつないで私の小学校、トットちゃんの学校には 体の不自由な子が何人もいた。

私のいちばんの仲良しは ポリオ（小児マヒ）の男の子だった。

校長先生は、一度もそういう子どもたちを 「助けてあげなさい」とか「手をかしてあげなさい。」とか、いわなかった。

いつも、いったことは、「みんないっしょだよ。いっしょにやるんだよ」 それだけだった。

だから私たちは、なんでもいっしょにやった。誰だって友だちがほしい。肩を組んでいっしょに笑いたい。

飢えてる子どもだって、日本の子どもと友だちになりたい、と思ってるんですから。これが、みなさんに、私が伝えたかったことです。

（ユニセフ親善大使 黒柳 徹子）